

練馬区小中一貫教育資料作成委員会（第8回）「キャリア教育の推進」部会 要点録

開催日時	平成21年12月14日(月) 午後3時30分～午後5時30分	
会場	練馬区役所本庁舎12階 教育委員会室	
出席者	委員	廣嶋憲一郎、小野雅保、石井友行、岡本昌子、根本裕美、飯塚剛、野田恵威子、望月徳生、高橋吉久（敬称略）
	その他	教育出版
	事務局	芝田智昭 指導主事

1 はじめに

事務局

進め方は、協議資料ということで中間報告書の最初のページから順番に進行していきたい。とくに3番の実践事例検討の6事例については、それぞれ項目を統一したり、表記の部分を修正したので、本意ではないように変わっている、または誤解されやすく修正されてしまっているなどがあったら、声を挙げていただきたい。

では、協議に移る。まず理論部分の検討ということで、岡本先生にお願いしたい。

2 協議

委員

その前に、事務局で理論部分の概要を少し説明していただいてからのほうがわかりやすい。

事務局

それでは理論部分の前2ページは、こちらでまとめたものである。(1)～(4)までで、4部会とも共通の項目になっている。

- (1) 基本的な考え方
- (2) 本部会の検討の視点
- (3) 重視する指導項目
- (4) 目指す子供像

まず「基本的な考え方」、以前に安井副校長先生につくっていただいたところから抜粋をしたような形になっている。平成11年12月の中教審答申、平成16年1月の「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」。これらの報告書を踏まえてキャリア教育の定義とは、このようなものとしていいのではないかというのが四角囲みになっている。

次に「本部会の検討の視点」。3点に集約するとこのようなものになるのではないかということをつくった。とくに「①体験活動を積極的に取り入れた指導」は、本部会の発足当初に廣嶋先生にご指導いただいた内容。まずは体験活動の重要性を確認して、実践例に結び付けていこうということでスタートしているから、①のような表記を入れてある。

「②子供が具体的な成長モデルを想像できる指導」は、キャリア教育は様々あるが、やはり自分

が成長していく上で将来こうなりたいとか、このような働きをしてみたいというモデルを体感する。モデルと接する機会を持つ指導が重要ではないかということが出ていたので、それをまとめた。

それから「③自己有用感を実感できる指導」が三つ目。重視する指導項目の中にもあるように、肯定感、有用感、自立心がまさに部会での柱にもなっているのをまとめてある。

次に「(3) 重視する指導項目」ということで①、②で整理した。「①重視する指導項目と定義」というのが、石井校長先生に何度もつくっていただいた表の真ん中の柱になっている「自己肯定感・自立心」「望ましい勤労観・職業観」。

「(3) ①イ 望ましい勤労観・職業観をはぐくむ」と書いてあるが、アでいきなり本文が始まっている。「ア 自己肯定感・自立心をはぐくむ」と書いて、改行して「自己有用感を高めるために」と修正をお願いしたい。

②として「教育課程上の位置付け」があるが、実践例あるいは話し合いの中でも、キャリア教育を実践するとしたら、このような教育課程上の位置付けになるのではないかというものを2行でまとめてある。

「(4) 目指す子供像」だが、「文科省が示す四つの能力を加味し、本部会では各期の標語と具体的な子供像を次のように設定した」ということで、キャリア教育の実践プランの内容をまとめてある。Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期それぞれの子供像をすべて書ければよかったのだが、紙面の都合上このような端的な表現になってしまっている。もしこのような表現がいい、こちらの内容を入れたほうがいいというところがあれば、ご意見をいただきたい。

委員

「(1) 基本的な考え方」のところに出てきたキャリア教育の定義について、小野先生から1枚プリントを出していただいている。小野先生、お話をお願いしたい。

委員

その中でもし工夫をしていただける、あるいは先生方のほうでご意見をいただけるのであれば、例えば「キャリア教育の推進」が大きな柱で(1)(2)(3)(4)とあり、(1)のリード文が6行、(4)のリード文が3行ある。とくに(4)の3行のリード文は文部科学省ではこうですよと言っているのを加味して、本部会ではこういう形で子供像を設定した。非常にわかりやすいと思う。Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期がなぜ「好きなことを見つけよう」、「夢から希望へ」、「希望の実現に向けて」というのかは、内容の吟味は別にしても、この3行がリード文として非常に生きてくるだろうと思う。

逆に、「(1) 基本的な考え方」の四角枠の「キャリア教育の定義」の前の記述「このような動向を踏まえ」は経緯。本部会では何々や何々を検討し、何々は何ととらえて、キャリア教育を次のように定義したとすれば、ここに落ちるだろう。少しその論議が必要かと思っている。

一番上はここに書いてあるのをそのまま書いた。下線の赤のところは「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識」、もう一つはブルーの二重下線で「主体的に進路を選択する能力・態度」。この二つの柱がある。

それを加味しながら、提案だが、「児童生徒一人一人が、主体的に進路を選択・決定できる能力」という上の二重下線の部分、「(4) 目指す子供像」で本部会のキーワードとなる夢とか希望を少し入れれば思う。あとは「しっかりと勤労観、職業観を身につけ」というのは望ましいところ。そのあとに、ブルーのところ「自分の将来に夢や希望を抱き」というのはいい言葉ではない

けれど、「その実現を目指そうとする態度を育てる教育」を本部会ではキャリア教育として定義した。要するに、上の定義だとやはり文科省かそれに関係する機関で、どこで本部会のカラーが出せるか。そのへんの論点をまとめる必要があると思った。

このへんを出した経緯は前にもお話しさせてもらったが、文科省のホームページの中の進路指導、キャリア教育とか、体験活動の必要性のところでは、今ここに盛り込んだような文章はひらいた形で結構出ている。そのへんを使いながら、やはり練馬のキャリア部会の多少個性的なキーワードを一つや二つは入れられたらいいなというところもあって、案として提案させていただいた。

同様に「(2) 本部会の検討の視点」と①の間に何行かのリード文が入るだろう。本部会はこのことを検討した結果、以下3点の視点を何とかと。あるいは「(3) 重視する指導項目」に「本部会の場合、この視点を踏まえた中でこういうものが出てきた」と1～2行入れると、わりと経緯が見えてくるかと思った。

どこまで削るとかいう問題はあるが、本部会の検討の視点、①、②、③となると、視点についての内容が各論で書かれてしまっている。なぜ①、②、③になったのか、もう少しそのあたりがわかりやすいものが必要なのかなと思う。

第1回から50数ページ要点録の中で論点のかんりの概略のまとめがあれば、ここに少し盛り込めるのではないか。

委員

文科省のキャリア教育の定義に、本分科会の味つけとして目指す子供像の「好きなことを見つけよう」「夢から希望へ」「希望の実現に向けて」ということで、キャリア教育の定義に点線の四角のような文言を少し入れ込んではどうかというご提案があった。

アドバイザー

子供像とリンクすることを考えると、小野先生の案を取り上げてもいいと思う。

ただ1か所だけ「しっかりとした勤労観・職業観」は、勤労観と職業観が逆になっているので本文の中で整合性が必要。「望ましい職業観・勤労観」は随所に出てくる言葉なので、いじらないほうがいい。

委員

では、文言の統一ということで「望ましい勤労観・職業観」で揃えていく。

委員

補足だが、常々考えていたのが能力論と態度論。文章は「能力・態度」となっているが、よく考えるとこれはすべて能力。でも考えてみると、意思決定をしようとする自分の意欲を高めて、こうしたいんだという関心・意欲・態度のレベルに非常に近いものがあったり、将来設計、プランニングはわかるが、夢や希望を持って生きる能力というのは、生きる態度だろうと。

結論は、しょうがないので2番目は「選択・決定できる」というのは能力的に入れて、ただ職業観とか勤労観みたいな価値観を自分に醸成するものとか、夢や希望を抱くのは能力かと言うと少し違うだろう。こういうものをすべてまとめてしまって「態度を育てる教育」と、あえて態度を一番後ろに入れた。反発するわけではないが、やはり何でもかんでも能力というわけでもない。

やはりA3のほうで通じる内容についても「高める学習」というのがありつつ、下のほうは「育む、活用する、養う、目指す」。ひらいた場合には、そういう解釈でいいのではないかという気はしている。キャッチフレーズ的に考えると、やはり目標とかねらいかなという気がする。

委員

能力、態度、育成したい力のことについて詳しくご説明いただいた。その他には「キャリア教育の定義」に本部会なりの味つけを少しということと、文言の統一が「望ましい勤労観・職業観」。あとは、それぞれの柱立てのところ、2、3行のリード文を入れて、検討の結果、本部会の考え方をに入れていくとよいのではないかというご意見をいただいた。

アドバイザー

原稿の内容として「教育課程上の位置付け」だけ気になっている。表現として現実問題はこうだけれど、この先どういうふうにするか。今年はこの中身で勝負してるけれど、キャリア教育自体は全教育活動と言われているので、ほかの教科の枠まで広がってほしい。キャリア教育推進の人たちはそういう思いを持っている。

例えば社会科、あるいは技術科、家庭科などはかなり色濃く出てくる可能性がある。推進する人たちは、算数や理科教育の中でもやはりキャリア教育は可能ではないかと言っている。そこが視野に入った表現で書いていると思う。

「実際には」と書いてあるから実際にはこれが中心だけれども、「多い」と書いてあるということはほかにもある。ほかは縮めてもいいから、何かもう1行くらい付け足しておいたほうが間違いない。

委員

平成16年1月以降に、いろいろと国の動向が変わっている。そのエッセンスみたいなのが少し入れられるとよい。

アドバイザー

横断型の課題はそのへんが難しい。実践している人はキャリア教育をやっていると思ってなくても、結果的にキャリア教育につながる内容であるということが結構多い。

委員

「本部会の検討の視点」の①、②、③と読むと、すごく特活の色が濃いという気がした。今「教育課程上の位置付け」を見るといいかなと思ったが、①は総合、②、③も特活となると、やはり特活が非常に色濃い気がしたので、そこを道徳とか生活科とすり替えていくとバランスがとれるかなという気がした。言いたいことをきちんと言えるというのが初期段階のキャリア教育というのを聞くと、やはり特活でなくてもという気がした。

委員

根本先生のご指摘のように、「本部会の検討の視点」はやはり道徳的、生活科的なものが少し薄いという感じがする。

もう1点、「教育課程上の位置付け」。本分科会の目指す子供像を見ていると、たしかに各教科の中、生活、道徳、総合的な学習の時間と特活が多いけれど、実は学校行事の中で培われる力もたいへん大きい気がする。実際、小学校では、キャリア教育のもとになる部分は学校行事の中で培われる力が結構あると思う。

委員

自己有用感という言葉と自己肯定感という言葉が混在して出てくる。芝田先生の文言を読むと、まず自己肯定感、自分はこれでいい。さらにステップアップして、自分は役に立っている。そういう枠組みで読めると思う。

例えば1ページ目の下の「自己有用感を実感できる指導」。そうすると、下のほうで「児童生徒は満足感や達成感を得て自己肯定感を高めることができる。ここで得た自分に対する前向きな感情は、次の行動への意欲にもつながっていく。このことから、キャリア教育を推進する上で」とあり、ここは肯定感と思う。

「自己肯定感を実感できる指導をこれまで以上に意図的・計画的に設定する必要がある。～そして役割終了後には互いの実績を肯定的に評価する場を設け『自分は人の役に立った。』『作業を進める上では自分の力は欠かせなかった。』等の自己有用感を実感できる」。

つまり、肯定感から有用感へステップアップすると読み取れば、1ページ目の下から3行目では「自己肯定感を実感できる」にしたほうが実践プランとのつながりもいいと思うが。

委員

役に立つというのがある種、有用感。例えば、「誰々のために役に立っている」、「地域の誰々の役に立っている」。役に立ったという実感は、意外と身近な感覚としてとれる。あるいは、自己肯定感の場合は「自分ってやっぱりすごいな」とか「自分ってこんないいところがあるのだ」という。

例えば「職場体験」で、「僕は何々さんと一緒にやって本当に助かった。よかったね」と相手から言われて、「ああ、私は役立ったのだな」と実感するようなかかわりと、自己肯定というのは自分で自分のよさをうなずくというか、場面的に自己肯定というのがわりと頻繁にあるのか。役に立って、「やってね」「ありがとう」とかそんな感じで、意外と係活動とか結構ある。だから、子供たちにとって有用感と肯定感はどちらが身近に体験、実感できるのか。

委員

レベル的に言うと、私のイメージでは自己肯定感とは他者がどうであろうと自分はこれでいいと認める。例えば、道徳の「長所を伸ばす」という授業を通して培うもの。自分はこれでいいと認め、さらに友だちとのかかわり、係活動とか、いろいろなかかわりの中で友だちから感謝される。自己有用感が自己実現につながる一つの足がかりになる。

ただ本当に自己肯定感には難しいと思う。高学年になるほど自己肯定感って下がってってしまう。まず、自分で自分のことを「これでよし」と自己評価しなければいけないところがあるから難しい。あるいは順番でなくこれは並列なのかもしれない。それも少し整理する必要がある。

委員

概念規定をやりだすととんでもないことになる。ある程度、部会として割り切って進んでいった

ほうがいい。まわりの子が認めてくれれば、役に立ったというのはすごくわかりやすい。どっちが先で、あとでという関係はない。余計な言葉を使うと混乱する。

委員

「(4) 目指す子供像」のところで、私たちは「好きなことを見付けよう」「夢から希望へ」「希望の実現に向けて」と一つのイメージになるような言葉をつくってきたが、これが「各期の標語と具体的な子供像を」というふうになっている。標語というのが一体何を指していくのか。

アドバイザー

「好きなことを見付けよう」というのが標語。

事務局

標語という言葉にこだわっているわけではないので、キーワードでもいい。

アドバイザー

目標にしたら、少し意味が違ってくる。たしかに標語というと、言葉をおいてあるだけだからなんとなく意味がない。でも、この言葉は一つ一つに意味がある。目標的な言葉だ。それを短く言い切ったから目標のほうがいいのかという気もするけれど、「目標をこんな一言で置き換えていいのか」と言われると少し自信がない。

委員

目標という言葉は少し危険だと思う。

事務局

子供を育てるときの、この期の方向性という感じ。電子辞書で調べた結果、標語の意味そのものは主義、主張、信条などを簡明に言い表した短い語句。モットー、スローガン。意味からすると標語でいい。

委員

われわれはずっと段階を追ってこれをつくり上げているから、ここの文章を見てⅠ期の後ろに書いてある「好きなことを見付けよう」とか、Ⅱ期の後ろに書いてある「夢から希望へ」というところに目がいく。けれど、初めて読む人がここの言葉によってそこへ目線がいくかというのと、そうではない。そこへ誘導するような言葉がうまく見つかるかというと思う。そのあとの「具体的な子供像」も目線がいかない。

委員

カギ括弧か何かつけてもらって、第Ⅰ期「好きなことを見付けよう」とか少し目立つようにして。「学校生活に適應する」とか、下の文章の3行と同じではないと。

委員

表記の問題だが、例えばI期の最後だけ丸が付いている。ほかはすべて文末の丸がない。プランのほうも、文末はすべてとる。これは統一したい。

委員

それでは、キャリア教育の実践プランのほうを石井先生にお願いしたい。

委員

前回ご指摘いただいたところを変更するとともに、後ろのページと対応できるように実践事例1～6の表示を各事例の左肩につけた。それから「好きなことを見付けよう」の「つ」の字は漢字に直しておく。

事務局

補足で、右下のほうに特別支援学級の中学校事例6で望月先生の事例の紹介をしている。単元名を「仕事に挑戦しよう」というふうに勝手に変えさせてもらった。当初は「職業家庭」という教科で、単元名もそのまま「職業家庭」だったと思う。

けれど、一覧にするとそのまま教科名、領域名が出るのではなく、単元名で書いているところがほとんどなので、「仕事に挑戦しよう」というふうに書かせていただき、教科名で「職業家庭」とした。

委員

「技術・家庭」だと中黒が入る。「職業家庭」も間に中黒ありで。

アドバイザー

事例6の左に「文化発表会」、これは何か。

委員

学校行事。

アドバイザー

学校行事と入れないとまずい。ということは、事例5もこの表記だとおかしい。「日常生活の指導」はいいと思う。「自立活動」もいいと思うけれど、「職業体験施設の訪問」は何だろう。

委員

「リトルティーチャー」というのが少し抜けている。

委員

ここだけが少し資料名と違うような気がする。中黒が一番内側にくるように、無理か。

委員

スペースの関係で、もしできればやってみる。

委員

ほかの実践事例の検討もあるので、またお気づきの点がありましたら石井先生のほうに願いたい。それでは実践事例検討ということで、1事例10分くらいずつやっていきたい。

事務局

補足で、各事例とも①～⑤までは共通。⑥以降は事例ごとにこんな項目が立てられるのではないかということで、私のほうで立てた項目。事例における児童の姿であったり児童の変容であったり、様々。⑥以降の項目についてもご意見いただければと思う。

委員

芝田先生、根本先生、私の概要の部分が同じような表になっているが、生活科のほうは長い単元の計画で、道徳のほうは1単位時間。そのあたりは概要の後ろに括弧をつけて説明ということで。

事務局

例えば「⑤概要（全20時間）」にして、アイウエオカをそれぞれ1～3とか4～7とか表記する。望月先生の表記のほうが、わかりやすい。

委員

では概要のところを、およその時間の流れに沿って20時間のうちの何時間扱いかをもう少し入れていただくということで。

委員

文末の調整で、「お手伝い探検の様子」、「探検発表会の様子」の「の様子」。何かわかりやすい表現があれば変えたい。

委員

様子という言葉はいらない。

委員

探検発表会で子供たちが女の子と男の子が持っている、これは何か。旗か。

委員

花束。子供がつくったので、折り紙の大きな花に紙の包装紙を巻き付けて「こうやって包装していきます」という実演。前に座っているのが花屋のおばさん。

委員

中学校の「職場体験」で「伝統工芸体験：友禅染」とか「調理実習（お弁当作り）」。たしかに伝

統工芸体験だけだと少しわからないけれど、友禅染と書いてあって「ああ。そうなんだ」とメッセージがある。このぐらいのポイントまで落とせるのであれば、精肉店とか花器店とか3文字くらい入るかもしれない。

委員

では、「お手伝い探検」と「探検発表会」の様子をもう少し詳しく入れるということで。

委員

芝田先生にお願いしたいのですが、6事例すべて①の表記の仕方で、実践プランは単元名のほうに括弧をつけている。どちらかに揃えたほうがいい。できることなら、プランに合わせていただいたほうが。

事務局

では、実践事例に括弧をつける。

委員

それでは生活科のほうはこれくらいで。実践事例2は私の持ってきた道徳1単位時間の扱いである。

委員

④の1行目で「自分の生き方を見つめる」はこれでいいだろうか。

委員

平仮名の「つ」で。

アドバイザー

概要の「見つめる」のところは「指導上の留意点」とか、何かあったほうがいい。できれば「せまる」の(1)も。

委員

では「見つめる」のところをもう一度書いて、メールで知らせるといことで。

委員

2番の(1)(2)は読んで話し合うときの発問だと思うが、「(3)自分の得意なことをやろう」というのも発問だろうか。(1)(2)と感じが違う気がする。

委員

「見つめる」の「この結果になるべきか迷ったとき母に助言され、私はどんな気持ちになったでしょう」という中心発問が抜けている。

アドバイザー

生活科の「キャリア教育との関連」の3行目は「積極的にかかわっていくことだと考える」、「貴重な機会となると考える」とある。言い切ってもらいたい。「積極的にかかわっていくことである」、「貴重な機会となる」のほうがスッキリする。

委員

道德のほうは前回の中心発問を使うということで、指導上の留意点のみ二箇所をもう一度入れてメールでお送りする。

委員

「友だち」の「だち」は平仮名でなく漢字で。

委員

それでは事例の3「部活動体験」。

アドバイザー

概要のオリエンテーションのところで、「必要な用具の説明(1)」と書いている(1)は1時間と書いてしまったほうがいい。でも②で「オリエンテーション1時間」と書いてあるから、(1)をとってしまうか。あと三角の矢印が活動量なら「活動量」という言葉がどこかに入っているといい。

委員

実践例はオリエンテーション1時間+部活動の体験も入るなら、部活動の体験がざっくり見ても10~20時間。

アドバイザー

オリエンテーションは1時間だけれど、それ以外の時間がどういうふうになるのか。

委員

活動量も広がり、活動の質も変わる。あとは先輩というか上級生がどんどん教えていく部分も広がっていくだろうし、それによって体験する子たちの活動の量も広がっていく。

委員

コミュニケーションとか体験の量などが広がっていく。

委員

時間的なものも広がっていく。簡単に言うなら、今はすぐ暗くなってしまうので5時と言っても5時前に終わってしまう。一応、保護者がいる場合には6時まででもいいというふうにしてある。明るくなってくれば、もっともっとできる。基本的には11月から12月、1月、2月と1週間ずつすべてやる。

委員

キャリア教育ということを踏まえて三角形のグラフをつくるのであれば、やはりコミュニケーションの量が増えていくというのを表したほうがいい。

委員

この枠に何か物差しをつけて、時間経過とともに活動の豊かさがどんどん広がっていくイメージをもたせたい。

アドバイザー

活動の豊かさというのはいい言葉かもしれない。説明として「ねらい」に出ている体力、技能の向上、人間関係の育成。下の横軸を「活動の豊かさ」として、中身をねらいにあった言葉で説明してあげれば、縦軸が時間でしょう。

委員

時間か回数ですね。

委員

では図で示した部分を少し工夫していただいて、メールでということ。
それでは事例4「職場体験」。

アドバイザー

中身はとくに問題ないと思うが、写真か何か残っていないだろうか。小学校の事例は三つともすべて写真が入っている。中学校のものも一つ入っている。ちょうど右上のスペースがピタッと空くから、そこに入れるといい。

委員

わかりました。では、写真だけ添付する。

委員

例えば第1時は「職場体験学習について理解する」ではなくて、「課題を持つ」とか。第19時は「本単元のまとめを行い、これからの自分との生き方の関連を考える」とか、少し総合的な体裁を整えたほうがいいと思う。

委員

では課題設定、課題追求、今後のことへという形で、芝田先生に文言を少しいじっていただく。
それでは事例5。

アドバイザー

「④キャリア教育との関係」の最後の語尾、「全教育課程を通じて重視していく必要がある」で

切る。

委員

内容ではないけれど、表の一番下のところはこんなに空白があるなら、もう少し詰めて①とか②というところに改行を入れたほうが見やすい。

アドバイザー

写真を大きくしてもいいなと思ったけれど、ただこれは子供の写真だけれど大丈夫だろうか。

委員

大至急、確認をとる。

事務局

別の「しごと」とイラストのこの上の段に三つ入っているイラスト。「はたらくってなんですか」とか「しごと」とか「働くとは…」。これの著作権は大丈夫だろうか。

委員

このサイズだと文字が見えないから、載せてもあまり意味がない。もし自分でつくったカットがあるんだったら、三つも載せないでそれを大きくする。

委員

では自作のカットだけにして、少し大きくしたい。写真の了解が得られたら、もう少し大きく。今までの流れからいくと、写真の説明を入れると何をしているところかがわかる。

委員

事例6「特別支援学級」中学校の事例「仕事に挑戦しよう」。「⑤概要」の「障がい」が平仮名というのは、漢字でいいのか。

委員

今の段階で言うと漢字。ただ障害者団体とかそういうところから言うと、「漢字ではなくて平仮名にしてくれ」というところがあるので平仮名表記にした。

事務局

今年度についてはおそらく漢字になると思う。

アドバイザー

概要の2行目、「教科授業で不足している部分は、総合的な学習の時間、学級活動、および道徳で補うように努めている」というのは、現実はどうだろうけれど書いたらまずい。

委員

「計画的に指導を進める」とか。

アドバイザー

支援学級だからいいという発想にはならない。下に「職業・家庭」と「総合」と両方写真が載っているからどう違うのだろうと思ったけれど、ここからきている。

委員

「職業・家庭」でやっている内容と、「総合」でやっている内容がきれいに峻別はできない。

委員

結局、支援学級の場合にはどの教科もキャリア教育、社会に出てというところがもう教材を選んでいく視点になってくる。そこをうまく表現しきれなかった。

アドバイザー

例えば「職業・家庭での学習を総合的な学習の時間とつなぎ」とか、あるいは「総合的な学習に発展させ、ふんだんに活動ができるように配慮している」とか。そんな表現にしたほうがいい。

「職業・家庭と総合的な学習の時間をつなぎ、活動の時間を十分に確保するように努めている」、あるいは「職業・家庭の時間で学習したことを、総合的な学習の時間にも発展させ、活動時間が十分に確保できるように配慮している」とかそんな感じ。あとで言ったほうがいいと思う。道徳、特活は書かないほうがいい。そうしたら下のところに総合的な学習の時間、たまたま便宜的に出ていると思うけれど意味合いはわかる。

委員

①のところに、学習の時間と二つ入れなくてもいいか。

アドバイザー

入れないといけない。①「仕事に挑戦しよう」は「職業・家庭」と「総合的な学習の時間」両方入れたほうがいい。結構、総合の時間を使っているということ。

総合の扱いは頭の痛いところ。現実の問題とやはり理屈の問題とあって、中学校はこういう使われ方している部分が比較的ある。これは特別支援の関係もあるかもしれないけれど、厳密に総合を大事にしている人は怒っちゃう。

先ほどの話じゃないけれど、何で学習課題がないところで授業が始まるんだとか、先生が勝手にやりたいことを補充の時間として使っているだけじゃないかみたいになってしまう。自ら課題を見つけたというのも大原則としてあるというふうに、設立当初はそれが売りだったから。

ある意味では、総合を勝手に使えるというのが非常に便利な時間ではある。

事務局

全体の締め切りが来週月曜 21 日。この場で確認やら修正やら資料の提供をお願いした先生方、水曜日または木曜日までにいただければたいへんありがたい。